

学校名	三木市立別所認定こども園
-----	--------------

1 学校教育目標	(1) 心も身体も元気な子	(2) 友達を大切に作るやさしい子	(3) よく聞き、よく考え自分の思いがはっきり言える子
----------	---------------	-------------------	-----------------------------

2 本年度の重点目標	(1) 身近な自然や動植物にふれる機会を多くもち、直接体験・感動体験を通して、思いやりの気持ちや豊かな感性を育てる。
	(2) 一人一人の個性や発達段階の理解に努め、個に応じた支援の充実を目指し、友だちとともに活動する楽しさや、思い合える仲間作りをする。
	(3) 家庭や地域の方に、こども園の教育・保育内容をさまざまな方法で工夫して伝える。

3 自己評価結果（達成状況）【 A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない 】

評価の観点	評価項目（取組内容）	取組（達成）の状況	評価	改善の方策
教育課程・指導	・幼保連携型認定こども園教育要領、三木市共通カリキュラムに即した指導を工夫する。 ・一人一人の子どもの内面理解や発達段階を踏まえた指導内容の充実や支援の方向性を探る。 ・異年齢児とのかかわりや生活を大切に、豊かな人間関係や主体性を培う。 ・幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けて、異校種間で気づきを伝え合う機会をもつ。	・職員会議（乳児、幼児、クラス、学年など）を充実させ、目指す子ども像や保育で大切にしたいことについて話し合い、共通理解をしたり、個人支援案を作成して個々の理解や支援についての方向性を確認した。 ・講師を招聘して園内研修会を行い、主体性を培うための保育展開や支援の仕方、環境構成について学びを深めた。 ・年長児が提案してくれた「おたすけポスト」が大活躍し、活発な異年齢児交流ができた。（ダンスを教える、マラカス作り、虫調べ、ゴミ集め、絵本の読み聞かせ、お礼の手紙交流など） ・小学生との交流、オープンスクール見学など、子どもたちが小学校に出かけていく機会を作り、回数を重ねるごとに小学生へのあこがれや親しみをもつことができた。また、事前事後の教職員の共通理解も大切に行った。	B	・今後も全職員で子どもを理解し、子どもの良さが発揮できるような保育の展開や支援を行えるようにする。 ・園内研修会では、保育の振り返りはもちろん他クラスの保育を見て学ぶ機会となったので、引き続き研修の機会を設け、資質向上に努める。 ・子どもたちの「やってみよう」を叶え、主体的に発展していくよう、子ども理解や支援のタイミング、環境構成に留意していく。 ・幼児教育と小学校教育の相互理解に努め、架け橋期の学びのつながりを意識していく。
道徳・人権教育	・身近な自然や動植物の飼育栽培をとおして、命の大切さや思いやりの心を育てる。 ・遊びや生活、さまざまな人とのかかわりをおとして、他者の存在や思いに気づき、人とかかわる力や規範意識の芽生えを培う。 ・「一人一人を大切に作る保育」について改めて考え、実践し、人権感覚を磨く。	・ダンゴムシやツマグロヒョウモンの飼育、カメの世話、バッタやツバメの観察など、四季折々の自然との出会いと別れの中で、感動体験や命の大切さを感じる心を育てる機会としてきた。 ・全職員参加の人権研修では、別所認定こども園・志染保育所の成り立ちと人権を大切に作る保育についての研修を開催し、改めて保育に携わる責任と地域の方への感謝の気持ち、人権感覚を磨き上げる大切さを学ぶことができた。 ・乳児は、育児担当制を取り入れ、食事・排泄・睡眠について担当職員が丁寧にいかかわり、愛着形成や基本的生活習慣が身につくように努めた。また、保育室の環境や制作活動のあり方、行事の持ち方について見直した。 ・幼児は、ありのままの自分を受け止められ、認められることで自尊心を高められるように努めた。思い違いやトラブルの機会を大切に、自分の思いを伝えたり、相手の思いに気づいたりできるよささえ、伝え合う仲間作りをしてきた。	B	・自然を介した実体験を大切に、そこから感じたことをいろいろな方法で表現したり、伝え合ったりしながらより深く子どもたちの心に残していけるように支援する。 ・保育者自身の人権感覚を磨き、子どもにかかわるよう、今後も人権研修を重ねていく。 ・より安心した信頼関係の土台を築き、基本的生活習慣の定着や人・物・自然に自らかかわろうとする主体性の芽生えを培うようにする。
特別支援教育	・支援の必要な園児の情報共有を全職員で行う。 ・一人一人の教育的ニーズに応じた支援を綿密に行う。 ・家庭や関係機関と連携しながら、支援の方向性を見極め、確かな成長に繋げる。	・定期的に特別支援員で会議を行い、個々の伸びや課題を職員間で共有し、個々に応じた支援を心がけた。 ・関係機関につないだり、担任が相談に同行したりして、家庭と園が同じ方向に向かって、子どもの成長をささえていけるように働きかけた。 ・各進学先との連絡・連携を密にし、子どもたちの引継ぎや指導のあり方について共有を行った。 ・特別支援員対象の園内研修を実施し、一人一人に応じた支援について学んだ。	A	・保護者の困り感に寄り添ったり、関係機関との連携を深めたりして、子どもの成長とともに喜び合える関係性を築きながら支援が充実するようにしていく。 ・個々に応じた支援ができるよう、職員間の共通理解に努める。 ・研修での助言や学びを活かし、次への手立てに役立てる。
家庭・地域との連携	・信頼される園づくり、関係づくりに努める。 ・子どもの学びや心の育ち、発達を伝える工夫をする。 ・ホームページ、園だより、クラスだより、ドキュメンテーションなどの充実を行う。 ・地域や近隣の小学校との交流や連携を行い、子どもたちの生活経験を豊かにする。 ・子どもの発達に合ったより良い行事の持ち方について、引き続き検討する。	・日々の保育の姿をドキュメンテーションにして掲示し、活動の旬や子どものタイムリーな様子を伝えることができた。すぐる配信や発表会だよりを通じて、意図や大切にしていることを伝える工夫を行った。 ・家庭教育学級では、時期や時間を考慮して開催し、親子のかかわりを楽しめるような機会にした。保護者からも好評だった。 ・小学校との交流では、なかよし班活動、プール、秋祭り、ハロウィン、豆まきなどで交流をした。 ・地域の夏祭りや園歌を披露し、多くの方に聞いてもらうことができた。 ・乳児組保育参加では、普段の様子をゆったりと見ることができ、園や家庭での姿、職員のかかわりなどを共有する機会になった。	A	・子どもの年齢や発達に応じた、行事のあり方について検討し、保護者に意図が伝わり、同じ視点で見えていただけるように努める。 ・今後もドキュメンテーション等を活用し、活動の様子、学びや保育者の願いも発信していけるようにするとともに、職員業務改善の手立てを考えていく。 ・親子のかかわりがより楽しめるような、家庭教育学級を計画実施していく。 ・子どもたちの興味関心に即した交流が展開できるよう、職員同士が連携を取りながら進めていけるようにする。 ・今後も大切に園歌を歌い続け、地域にも根差した園歌となるようにしていく。
健康・安全教育 防災教育	・避難訓練では、さまざまな場面に対応できるように実施し、より実際に即した訓練になるようにする。また「自分の命を自分で守る、みんなの命をみんなを守る」という意識がもてるようにする。 ・手洗いや早寝早起き朝ごはんなど、基本的生活習慣を身につけ、健康に過ごせるようにする。 ・遊具の点検や危険箇所を確認を行うとともに、安全教育の充実を図る。	・職員に訓練時間を知らせず実施したり、早朝、夕方、土曜日にも訓練を実施したりして、より実践に即した訓練を行った。また、消防署の方を招いて避難訓練についての助言をいただき、火災通報装置の使い方について実践できた。 ・避難時の持ち出しについて、見直しと整理を行った。 ・不審者対応について、園児、職員の安全確認方法の見直しを行った。 ・看護員による園児対象の「健康教室」を実施し、朝ごはんを食べることや食べ物栄養などについて各学年に応じて学ぶ機会を設けた。 ・全職員対象に、嘔吐研修、緊急対応時研修、AED研修等を実施し、緊急時、園児の安全を守るように学んだ。 ・遊具や施設の点検を行い、必要箇所の修理も行った。	B	・さまざまな想定をしながら訓練を行い、子どもたちが「自分の命は自分で守る」意識がもてるように話していく。 ・自分の身体や健康に興味関心をもち、家庭も巻き込んで望ましい生活習慣が身につくようにしていく。 ・ヒヤリハットを全職員で共有し、大きなけがや事故につながらないように、安全点検を行っていく。 ・職員の配置が日や時間によって変わるので、安否確認を徹底する。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価	・保護者アンケートの評価だけでなく、職員の反省をふまえて評価することが大切である。B評価の項目も見られるが、今後さらに保育内容や園運営の質の向上を目指そうとしている。
--------------------------	---

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
評価Bは妥当である。 ・行事の参観を通して、子どもたちが年齢ごとの発達に応じた表現を楽しみながら取り組んでいることが表情からも伝わり、園生活を楽しんでいる姿が印象的であった。 ・子どもの発想や主体性を大切にしながら、それを引き出す保育者の支援とともに、保育者自身の発信も大切にし、子どもと保育者が共に学び合う「共主体」の関係を目指した保育の充実が期待される。 ・小学校との接続については、相互参観などの取り組みにより、教職員同士の伝えあいができていることは交流を通して、子どもたちが小学校をより身近に感じられるようになり、スムーズな就学へつながる。今後も連携を継続していくことが望ましい。
子どもの姿や取組の様子から評価Aでも良いのではないかと。 ・日々の保育の中で、子どもたちが互いに思いやる姿や命の大切さに気づく経験を重ねていることが大切であり、子どもの発言や気づきを大切にしながら広げていく保育が行われている。 ・交流は活動だけでなく、心の交流を大切にすることが人権教育につながる。保育者がその視点を意識してかかわっていくことが重要である。
評価Aは妥当である。 ・特別な支援を要する子どもに対して、個々の状況に応じた丁寧な支援が行われており、行事の場面でも子ども同士が自然に協力し合う姿が見られた。 ・子どもも一人一人の理解の仕方に合わせて教材や方法を工夫するなど、職員が知恵を出し合いながら支援している。
評価Aは妥当である。 ・保護者との日常的なコミュニケーションが丁寧に行われており、保護者との信頼関係が築かれている様子が感じられる。 ・地域との交流についても、地域行事への参加などを通して連携が図られている。
評価Bは妥当である。 ・災害や不審者対応などの危機管理については、日頃からの訓練や備えが重要であり、様々な状況を想定した継続的な取組が必要である。 ・命にかかわる重要な分野であるため、現状に満足することなく、今後も訓練や体制の見直しを重ねていくことが求められる。